ヤマナカ100年の物語❶

ヤマナカの創業者・中野冨七は、明治30年（1897年）8月15日、愛知郡鳴海町相原郷（現在の名古屋市緑区）に生まれました。尋常高等小学校を卒業後、乾物問屋のカネヘイ羽根田商店の奉公人として修業します。

店の掃き掃除、仕入れの手伝い、お得意先まわりをはじめ、どんな仕事でものみこみが早く、周囲を驚かせました。程なくして仕入れを任され、15歳の頃には番頭格に。朝から晩まで休みなく働くうち、独立開業を夢見るようになります。

大正11年（1922年）2月7日、その夢がついに花開きました。カネヘイの、のれん分け1号店として中区正木町に

食料品店を開店したのです。不況にもかかわらず、6坪半（21.5㎡）の店は客でにぎわい、初日は68円50銭の売上がありました。食料品の大店で1日15円も売れれば「繁盛」と言われた時代、冨七は夢の第一歩を喜びました。

ヤマナカ100年の物語❷

創業者・中野冨七は、創業時から「安く仕入れ、人の3倍売る」商法を実践しました。さらに、付加価値のある商品を手がけたことが成長の原動力になりました。

その代表がサケやマスの「みりん漬け」です。自家製造なら仕入コストが半値ですむことに目をつけたのです。店近くの工場で加工に取り組み、商品は飛ぶように売れました。

昭和(1926年～)に入ると戦時色が商売に影を落とすようになりますが、商売への実直さは変わることがありませんでした。姪がお得意様のため、配給品をとっておこうとすると、「外で並んで待っている人のことを思え」と叱りました。戦時下でも不正を行わない態度は地域の人々に認められ、愛知県主催の「ありがとう親切運動」では「親切な店」として表彰を受けました。

冨七は終戦後の混乱期も正直一途に商売を続け、ヤミ市と距離を置く姿勢を貫きました。

「昭和恐慌」と呼ばれる不況に見舞われ、失業者が街にあふれました。冨七自身やその商売にも少なからず影響がありましたが、冨七は効率向上のため、営業用にオート三輪を導入。同業者の多くが大八車やリヤカーを引いていた時代、ヤマナカのオート三輪は評判になり、近所から見物人が来るほどでした。

『ヤマナカは2022年で創業100周年』

ヤマナカ100年の物語 ❸

戦後の統制が廃止され、人々の暮らしにゆとりが出てきた頃、店1軒ですべての買物をすませる「ワンストップ・ショッピング」が日本に紹介されました。中野冨七（創業者）の長男・富彦は、総合食品店へ切り換えなければ将来の発展はないと考えました。冨七は乗り気ではありませんでしたが、結局は折れ、昭和27年（1952年）7月、ヤマナカ本店が名古屋初の総合食料品店としてオープンしました。新店は従来の乾物、瓶缶詰、調味料、果物、野菜に加えて、新たに菓子、パン、鮮魚を扱い、大いに繁盛しました。

同様に、公開経営についても富彦が主導して取り組み、昭和32年（1957年）7月、株式会社ヤマナカが誕生しました。近所のお得意が株を引き受けてくれたことに冨七・富彦父子は感激し、さらなる会社の発展を胸に誓ったのでした。

昭和35年中区号のスーパー
中区正木町のヤマナカ・フードセンター

次に富彦が取り組んだのが売場のセルフ・サービス化です。研究熱心な富彦が、他店よりも早くセルフ・サービスを取り入れようとするのに対し、冨七は反対し、双方の意見は平行線をたどりました。このことに限らず、富彦の「店を良くしたい」という情熱は父子の意見の対立を招いた一方で、店の近代化を推し進める原動力になりました。セルフ・サービスも昭和35年（1960年）12月に実現しました。